

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月14日現在

機関番号：34403

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520414

研究課題名（和文） 品詞の通言語的研究

研究課題名（英文） Cross-linguistic study of word classes

研究代表者

笹間 史子（SASAMA FUMIKO）

大阪学院大学・情報学部・准教授

研究者番号：60330114

研究成果の概要（和文）：

北アメリカ北西部の諸言語では品詞分類がしばしば問題となってきた。品詞のなかでも普遍性が高いとされる名詞と動詞の区別の有無さえも議論の対象となってきた。本研究では、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州で話される海岸ツィムシアン語とスライアモン・セイリッシュ語を主な対象として品詞分類の問題を検討し、これらの言語における名詞と動詞の区別がいくつかの基準をたてることで可能となることを明らかにするとともに、形容詞等の品詞分類についても検討をおこなった。

研究成果の概要（英文）：

Identifying word classes has been a subject of controversy in the languages of the Pacific Northwest. This study examines the distinctions between word classes, especially between noun and verb in two languages of the Pacific Northwest, namely, Coast Tsimshian and Sliammon Salish.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野： 人文学

科研費の分科・細目： 言語学・言語学

キーワード： 品詞、名詞と動詞、形容詞、北アメリカ先住民諸語、海岸ツィムシアン語、スライアモン・セイリッシュ語

1. 研究開始当初の背景

北アメリカ北西部で話される先住民諸語であるセイリッシュ語族、ワカシュ語族、チマクム語族の諸言語は、以前より名詞と動詞

の区別を欠くと言われ、その品詞分類が議論の対象となってきた。これらの諸言語のすぐ北で話される海岸ツィムシアン語においても、名詞と動詞の区別は必ずしも容易ではなく、その品詞分類は文法記述における大きな

問題であった。

2. 研究の目的

本研究は、しばしば「名詞と動詞の区別がない」と言われてきた北アメリカ北西海岸先住民語の視点からスタートして、品詞に関する諸問題に対するより広い理解を得ることを目的とする。どのような基準にもとづいてどのような品詞が区別されるのか、また品詞分類は言語の類型の特徴とどのように関係するのか、北アメリカ北西海岸以外の言語も視野に入れ、通言語的に考察する。

(1) 名詞と動詞の区別

海岸ツィムシアン語、スライアモン・セイリッシュ語をはじめとする北アメリカ北西部の諸言語は、名詞と動詞の区別の困難さで知られ、ときに名詞と動詞の区別を欠くとも言われてきた。これらの言語において、名詞（的なもの）と動詞（的なもの）はどのような共通性をもつのか、両者を区別することは可能なのか、可能であるとしたらどのような基準に基づいて区別することができるか、検討する。

(2) 自動詞と他動詞

名詞と動詞の区別が曖昧な一方で、自動詞と他動詞はさまざまな点において異なるふるまいを見せる。名詞と自動詞はどのような点で共通なのか、他動詞を自動詞化する（つまり項を減らす）、あるいは自動詞を他動詞化する（つまり項を増やす）操作にはどのようなものがあるのか、検討する。

(3) 名詞と動詞以外の品詞分類

海岸ツィムシアン語とスライアモン・セイリッシュ語の品詞分類にかんする研究は、これまで主に名詞と動詞の区別という視点からおこなわれてきた。本研究では、その対象を名詞と動詞以外の品詞にも広げ、とくに形容詞の問題をとりあげる。名詞とも動詞とも別のカテゴリーとして形容詞が区別される言語がある一方で、海岸ツィムシアン語やスライアモン・セイリッシュ語では形容詞が動詞（自動詞）の下位範疇ととらえられることが一般的であった。これらの言語において形容詞はどのような特徴をもつのか、形容詞という品詞をたてる必要があるのか、検討する。

さらに、名詞・動詞・形容詞以外にどのような品詞をたてるべきか、それらはどのような基準によって区別されるのか、考察する。

(4) 言語タイプと品詞分類

海岸ツィムシアン語とスライアモン・セイリッシュ語はいずれもいわゆる複統合的と呼ばれる言語であり、一語に対し多くの形態的操作がおこなえ、それを通して多くの概念を盛り込むことができる。そのようなタイプの言語に共通する品詞分類の問題について考察するとともに、タイプの異なる言語との比較対照によって、言語タイプと品詞分類の相関関係についてもさぐっていく。

3. 研究の方法

本研究では、現地調査および文献から得られた情報をもとに、品詞の問題を考察した。研究代表者・研究分担者はともに、各年度1ヶ月程度の現地調査をおこない、品詞分類にかんする資料を収集した。現地調査は、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州プリンス・ルパート（研究代表者）およびパウエル・リバーまたはキャンベル・リバー（研究分担者）において、海岸ツィムシアン語およびスライアモン・セイリッシュ語の母語話者の協力を得ておこなわれた。

現地調査においては、どのような要素がどのような要素と共起し、どのような機能を果たすのか、どのような要素が品詞の区別に有用であるか、検討をおこなった。

日本国内においては代表者と分担者は成果を報告し合い討議するとともに、他の研究者とも適宜、研究討議をおこなった。

4. 研究成果

(1) 名詞と動詞の区別

海岸ツィムシアン語とスライアモン・セイリッシュ語では、名詞的な語と動詞的な語がともに述部として用いられる一方で、ともに項として用いることが可能である。また、複数表示、人称表示、時制やアスペクトなど、両者に共通に用いられる形態法が多く、これらが名詞と動詞の区別を難しいものにしていった。海岸ツィムシアン語とスライアモン・セイリッシュ語はともに統合度の高い言語であり、語形成においてはさまざまなタイプの重複や接辞（接頭辞・接中辞・接尾辞）が用いられる。形態法が豊かな言語ではしばしばこうした要素が品詞分類の重要な手がかりとなるが、海岸ツィムシアン語とスライア

モン・セイリッシュ語ではそれが必ずしも容易ではない。

しかしながら、海岸ツィムシアン語とスライアモン・セイリッシュ語についても、重複を初めとするアスペクトマーカとの共起、所有マーカとの共起、項の増減にかかわる接辞との共起などをもとに、両者を区別することができることが確認された。

(2) 自動詞と他動詞

海岸ツィムシアン語にもスライアモン・セイリッシュ語にも項の増減にかかわる接辞が複数みられる。自動詞を他動詞化する接辞、他動詞を自動詞化する接辞にはどのようなものがあるのか、記述をおこなった。その他、自動詞・他動詞を名詞節化する手段についても考察をおこなったが、これについては今後さらなる調査研究が必要である。

(3) 名詞・動詞以外の品詞

名詞・動詞以外では、とくに形容詞に焦点をあてた。海岸ツィムシアン語とスライアモン・セイリッシュ語ではしばしば形容詞という品詞をたてず、形容詞的な概念を表す語は動詞に分類されてきた。本研究では、形容詞的な語がどのような意味範疇をカバーし、どのような形態統語的特徴を有するのか、あらためて検討をおこなった。そして、意味的に比較的限られた小さなクラスをなすものであるが、項の増減にかかわる接辞との共起や名詞を修飾する際のふるまいなどにもとづいて、形容詞というカテゴリーをたてる(すなわち、形容詞を他の動詞と区別する)ことは可能であること、そして一部の文法現象を説明するためにそれが有用であることを認めた。

なお、形容詞的な概念は接辞やクリティックによっても表される。こうした表現と自立語による表現との違いについても検討をおこなった。

名詞・動詞・形容詞以外の品詞分類についても、どのような基準に基づいてどのような品詞をたてるべきか検討した。特に、時間的表現に関わる副詞的要素については、ひとつの品詞を立てることも考えられうるという考察に至ったが、この点については原語テキストの収集とそのなかでの副詞的な語の生起をさらに研究する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

① 笹間史子

海岸ツィムシアン語の「再帰」クリティックについて、『大阪学院大学外国語論集』65、2012、査読有

② 渡辺己

スライアモン・セイリッシュ語の品詞分類について、影山太郎・沈力編『日中 理論言語学の新展望 3 語彙と品詞』(くろしお出版)、2012、99-121

③ 笹間史子

海岸ツィムシアン語の使役接辞について、『大阪学院大学外国語論集』63、2011、31-48、査読有

④ 笹間史子

海岸ツィムシアン語の所有表現、『大阪学院大学外国語論集』62、2011、29-46、査読有

⑤ Watanabe, Honoré

A Look at Noun and Verb in Sliammon, D. Beck (ed.), *A Festschrift for Thomas M. Hess: on the Occasion of his Seventieth Birthday* (Whatcom Museum Publications No. 21), 2010, 179-196, 査読有

⑥ Watanabe, Honoré

Fillers and Their Relevance in Describing Sliammon Salish, N. Amiridze, B. H. Davis & M. Maclagan (eds.) *Fillers, Pauses and Placeholders* (John Benjamins), 2010, 173-188, 査読有

[学会発表] (計4件)

① 渡辺己

Dependency and Insubordination in Sliammon Salish, Symposium "Dynamics of Insubordination," 2012年10月26日 Research Institute for Language and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies

② 渡辺己

Reduction from bi-clausal to mono-clausal constructions in Sliammon Salish, 2012 Meeting of the Society for the Study of the Indigenous Languages

of the America (SSILA), 2012年1月6日
ポートランド (アメリカ)

③ 渡辺己

Valency Classes in Sliammon Salish,
Conference on Valency Classes in the
World's Languages, Max Planck
Institute for Evolutionary Anthropology,
2011年4月16日 ライプツィヒ(ドイツ)

④ 渡辺己

Coordinate Constructions and
Coordinators in Sliammon Salish, 2011
Meeting of the Society for the Study of
the Indigenous Languages of the
America (SSILA), 2011年1月9日 ピッ
ツバーグ (アメリカ)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

笹間 史子 (Sasama Fumiko)
大阪学院大学・情報学部・准教授
研究者番号： 60330114

(2) 研究分担者

渡辺 己 (Watanabe Honoré)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文
化研究所・准教授
研究者番号： 30304570